九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『英語化は愚民化――日本の国力が地に落ちる』（集英社新書、2015年）

施，光恒
九州大学大学院比較社会文化研究院

https://hdl.handle.net/2324/2349303

出版情報：九州大学地球社会統合科学府＆附属図書館コラボトークイベント「学際的な読書の深みへ：ワクワクの森へご招待」，2019-10-09
バージョン：
権利関係：

学際的な読書の深みへ
ワクワクの森へのご招待(^_^)/

『英語化は愚民化――日本の国力が地に落ちる』
（集英社新書、2015年）

施 光恒（九州大学）

九州大学中央図書館きゅうとコモンズ

2019年（令和元年）10月9日

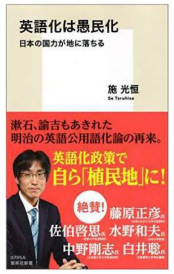
- 施　光恒（せ　てるひさ）
  - 福岡市生まれ。九州大学比較社会文化研究院・教授。
  - 専門は、政治理論、政治哲学、人権論、日本文化論。
  - 最近は、リベラリズム論、ナショナリズム論、グローバル化批判に関心。
- 単著
  - 『本当に日本人は流されやすいのか』角川新書、2018年
    （今年3月の福岡県の公立高校の国語の長文問題はここから出題）
  - 『英語化は愚民化』集英社新書、2015年
  - 『リベラリズムの再生』慶應義塾大学出版会、2003年

- 共著（最近のもの）
  - 「リベラリズムと徳」（有賀、田上、菊池編『政治と徳』（晃洋書房、2019年、所収）
  - 「主権者教育における責任や義務」（関口編『政治リテラシーを考える――市民教育の政治理想』風行社、2019年）
  - 「ナショナリズム――グローバル化の進展の中で」（出原政雄、長谷川一年、竹島博之編『原理から考える政治学』法律文化社、2016年、所収）
- 趣味　読書、園芸、ランニング、ドライブ
- 連絡先
  - se@scs.kyushu-u.ac.jp
  - 〒802－0395　福岡市西区元岡744番地　九州大学大学院比較社会文化研究院
  - 092-802-5624

『英語化は愚民化』について

【目次】

はじめに　英語化は誰も望まない未来を連れてくる
第1章　日本を覆う「英語化」政策
第2章　グローバル化・英語化は歴史の必然なのか
第3章　「翻訳」と「土着化」がつくった近代日本
第4章　グローバル化・英語化は民主的なのか
第5章　英語偏重教育の黒幕、新自由主義者たちの思惑
第6章　英語化が破壊する日本の良さと強み
第7章　今後の日本の国づくりと世界秩序構想
おわりに 「エリートの反逆」の時代に



大学入試問題で頻出

- 例、埼玉大学（経済学部、小論文、2016）

次の文章を読み、問１・２に答えなさい。

問１　内容を４００字以内で要約しなさい。
問２　「英語公用語化」論には批判的な見方がある一方で、英語を学ぶことは学生にとって必要なことである。なぜ英語を学ぶ必要があるのか。あなた自身の考えを４００字以内で書きなさい。

今日の話題

I.　英語化はどのように進められているか

II.　なぜ、グローバル化、英語化が進むのか

III.　「グローバル化、英語化は時代の流れである」「進歩である」は正しいか

IV.　英語化は、日本の社会や学問にどのような影響を及ぼすか

V.　今後の日本、および日本の高等教育、研究の針路はどうあるべきか。

Ⅰ. 英語化はどのように進められているか

1. 小学校での英語正式教科化

- 2020年度（早いところでは2018年度）より、小学校5，6年生から英語を正式教科に。週3コマ程度。
  - 授業とは別に毎日、英語に触れる機会も作る。
- 3，4年生から「外国語活動」（週1，2コマ）。
- 一部の地方自治体ではすでに開始。
- 例えば、さいたま市
  - 市内のモデル校から始め、2016年度には市内のすべての小学校で一年生から正式教科。
- 岐阜市
  - すでに2015年4月から、小学校一年生から正式教科。

2. 中学、高校、大学では

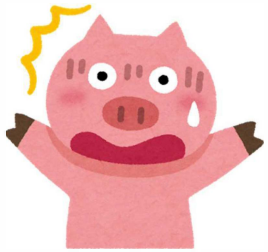
- **中学校、高校**
  - 原則上「オール・イングリッシュ」方式の導入
    - 英語授業は英語のみ（日本語禁止）
    - 文法も単語も英語で説明
- **大学入試**
  - 4技能重視（読む、聞く、話す、書く）
  - 来年度から民間試験大規模導入（TOEFL、IELTS、英検など）
- **大学**
  - 英語での授業の大幅増加
  - 下村博文文部科学大臣（当時）は、2013年に**「10年後までに5割超を英語に」**という成果目標を提案
  - 有力大学には、英語だけで卒業できるコースをなるべく全学部に。
    - 東大理学部化学科は、すでにすべての授業を英語化した。
    - 京大 一般教養科目の2分の1、九大は全授業の4分の１、山梨大は一時、全部の科目を英語化という報道。

3. 公務員採用も英語重視になる見込み

- 国家公務員試験（総合職）にトーフルの活用（2015年度から）
- 外国からの投資を呼び込むために、法令の英語化推進
  - 英語での行政対応も推進
- ＴＰＰ11（環太平洋戦略的経済連携協定）の影響で、さらに進む見込み
  - **地方自治体が行う小規模の公共事業の仕様書も英語で書き、入札手続の説明も英語でしなければならなくなる可能性**
- なおＴＰＰの正文には日本語が入らず。
  - 日本の国会で英文をみながら国内法の改正が進む

4. 企業内公用語を英語にする企業の増加

- 楽天、ユニクロは、すでに2012年ごろから社内公用語を英語にしている。
- ホンダも社内公用語を英語にすると決定
- その他、日立や資生堂なども。
- もうすぐ、「ええっ仕事で日本語使ってるの？ふーん。（3流企業なんだね～）」となるかも。



II なぜ、グローバル化、英語化が進むのか

- **「グローバル化」、「ボーダレス化」とは？**
  - 国境線を取り払って、ヒト、モノ、サービス、カネの移動が自由になり、活発化する現象。
  - この中では、特に資本（カネ）の国際移動が自由になったことが大きな影響力をもつ。
- グローバル化が本格化した時期
  - 英米では1980年代から。
  - 日本では1990年代後半から本格化
    - 「グローバル・スタンダード」という言葉
    - 1996年に初めて新聞紙上に登場
    - 「日本型金融ビックバン」
    - 「フリー、フェア、グローバル」が合言葉

「資本の国際的移動」の悪影響

- **各国の企業や資本（お金）は世界中移動できるようになった。**
- **グローバルな企業や投資家はできるだけ稼ぎやすい国を好む**
  - **企業は、稼ぎやすいところに会社や工場を移動させる。**
  - **投資家は、稼ぎやすいところにお金を動かす。**
- **各国の政府は…**
  - **外国からの企業や投資（お金）をなるべく引き付けたい。**
  - **自国の企業が国外に出て行ってしまうことを防止したい。**
- 各国の政府とグローバルな投資家や企業との力関係が逆転。
  - **グローバルな投資家や企業は、政府をいわば脅し、要求を呑ませることができるようになった。**
  - **例、「法人税を下げてくれないと、海外に出ていくよ」「人件費が下がるような政策をとらないと、貴国への投資を引き上げるよ」など。**
- **その結果、各国の経済政策は、非常に似通ったものに。**
  - **企業や投資家にウケる政策しか取れなくなる。**

日本を含む各国の経済政策の一律化

- 税制改革
  - 法人税（企業からとる税金）引き下げ、高所得者の所得税引き下げ、消費税の引上げ
  - 例えば、安倍政権発足から、消費税は５％アップ、法人税は7%以上ダウン（37%→29.7%）
- 労働者の権利を削る（安いコストで人を雇えるようにする）
  - 賃金を抑える、正社員ではなく非正規社員を雇いやすくする、労働時間規制や解雇規制の緩和
  - 研修などは、なるべく会社の経費ではしたくない。大学など教育界にさせる。（英語化も）
- 規制緩和、民営化
  - 不況でも稼ぎやすい分野（医療、農業（食糧）、エネルギー、教育など）でもビジネスできるようにする。
    - 英語化もその一環。例、来年度からの大学入試への民間試験導入。授業の英語化で英語科だけでなく、他の教科書も売り込める。
  - 農協や簡易保険、各種圧力団体（医師会など）の解散
- 福祉や公共事業の削減（税金を安くする、企業の負担を減らす）
- 自由貿易の推進
  - 産業政策、保護主義的政策（関税など）の禁止（TPPなど）
  - 国際的に見て弱い国内産業部門の再編、淘汰
  - 公共投資などで国内経済を活性化し、内需を増やすよりも、手っ取り早く外需を奪い合う。

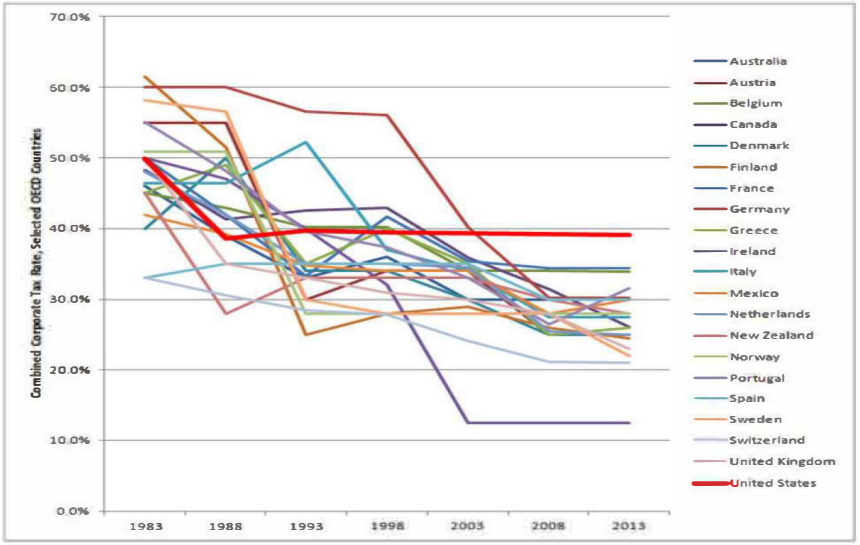
→ グローバルな投資家や企業に有利な政策ばかりに。

→ 民主主義がうまく働かなくなる（庶民の声がどどきにくくなる）

→ さらに、格差拡大へ。経済力の政治権力の変換という悪循環も

法人税の引き下げ競争

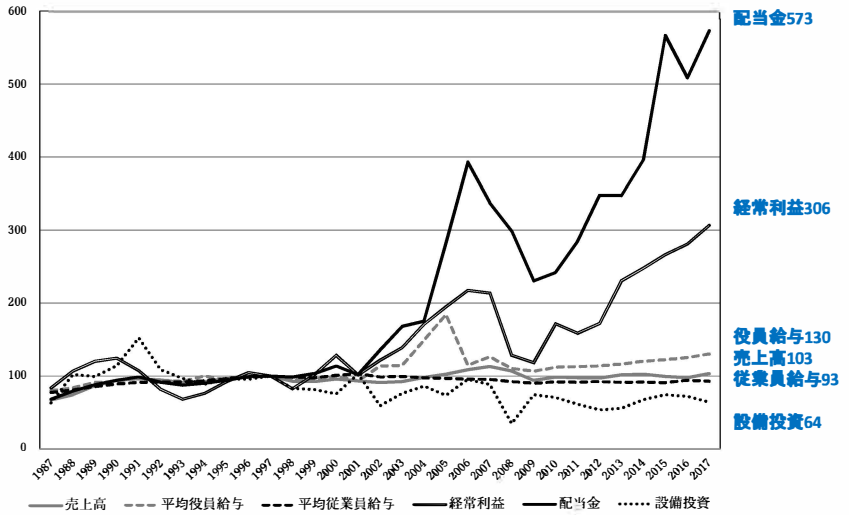
US News.comのサイトより 2013年7月23日付



日本の大企業のグローバル化対応の結果(´･ω･`)

売上高、給与、配当金、設備投資等の推移（資本金10億円以上）

1997年を100とした場合　「法人企業統計調査」より。施研究室の博士学生　相川清氏作成

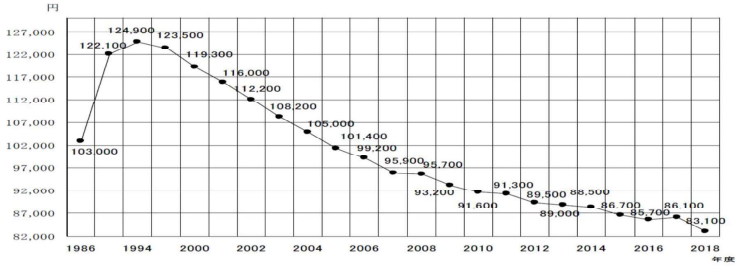


貧しくなった日本

日本の実質賃金の推移

家計の悪化

- 東京で一人暮らしの大学生向けの仕送り額(東京私大教連)
  - 1994年度12万4900円→2018年度8万3100円(過去最低)
- 1日当たり生活費(仕送り額ー家賃÷30)
  - 1990年度2460円 → 2018年度677円



- 「国民生活基礎調査」(厚生労働省)
  - 全世帯の平均所得
    - 1994年664.2万円 → 2017年551.6万円(約16%下落)

Ⅲ「グローバル化、英語化は時代の流れである」「進歩である」は正しいか

1 「グローバル化史観」と「進歩」のイメージ

- グローバル化や英語化があまり批判を受けることなく進められる一つの理由
- 通俗的な歴史観、進歩観
  - 「21世紀は国民国家の時代ではない」。
  - 「国民国家の解体、地域統合体などの超・国家的な枠組みへの移行こそ歴史的必然」。
  - **国境線を取り払うことこそ、進歩**である。
  - 「貿易自由化は世界の流れ…」
  - 「英語化は世界の流れ…」

●「進歩」のイメージ

- 国民国家やナショナリティの終焉という議論
  - 宿命論的かつ歴史法則主義的な見方
  - 身近な「土着」のものを脱し、世界共通の「普遍」へと至る一方通行的発展の過程という「進歩」、「近代化」のイメージ
- 人間社会の進歩の図式（より大きな社会への統合）

村落共同体 → 国民国家 →

地域統合体（ＥＵなど） → 普遍的で単一の世界秩序・枠組み
（グローバル市場、グローバル統治）

- 言語についても同様

各地の方言 → 国語 → 世界共通語（事実上、英語）

- 「進歩」「歴史の趨勢」とは**「土着から普遍へ」**の単線的発展過程だという認識

2 西欧近代社会の成立と、「翻訳」と「土着化」

（1）ヨーロッパ中世とラテン語

西欧の「近代社会」の成立期に大きな役割を果たしたのは、「普遍」の知の「翻訳」「土着化」

- **ヨーロッパの中世**
  - ラテン語がヨーロッパの共通語。
  - 政治的にはいくつもの王国が存在し分かれていたが、宗教的・文化的には一体。
- **ラテン語はローマ・カトリック教会の公用語**
  - 文法（グラマティカ）、正書法が整っていた。
  - 神の言葉は、唯一の整った言語であるラテン語で伝えられるべきという発想。
  - 礼拝、儀式はラテン語。カトリック教会の権威の源泉だった。
- **ラテン語は学問の言葉でもあった**
  - 庶民の日常会話は各々の地域の土着語（俗語）だったが、学問はラテン語
  - 自然科学、哲学、政治、法律の言語
  - 中世の大学は、講義や議論はラテン語

- **中世の特権階級**
  - 一握りの特権階級。当時の「グローバル・エリート」。国境、国籍にとらわれなかった
  - 特権階級はラテン語を用いていた。貴族、聖職者、学者など。
- **中世の庶民**
  - 各地域の土着語（俗語、現地語）で生活を営む
  - ラテン語は理解せず。
  - 土着語は、文法、正書法が不安定。
  - 信仰は、カトリック教会を介してのみ
    - 聖書が読めなかったため。
    - 歴史神学者・徳善義和「ローマ教会は、言語によって民衆を切り離していた」。
  - 学問の世界からも隔絶。
    - 日々の生活に追われるのみ。

（2）宗教改革の意義

- **16世紀前半の宗教改革運動**
- **宗教改革（聖書の土着語訳）　→　各「国語」の成立**
- ルター（1483-1546）
  - 「民衆の口の中をのぞき込むように」翻訳することをめざす
- ティンダル(1494-1536)
  - 「牛に犂を引かせて畑を耕す少年が、いまの教皇よりも聖書に詳しくなるようにしてみせる」

- **聖書の翻訳の意義**

1. 中世ヨーロッパ社会の構造を揺るがした
   - ローマカトリック教会の権威を疑わせ、近代を準備
2. 土着語の発達を促し、「国語」に
   - ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の抽象的語彙が翻訳され、土着語（ドイツ語、フランス語、英語など）が知的言語に。
3. 各地の一般庶民のコンプレックスを吹き飛ばし、誇りを与えた。
   - 田川建三（聖書学者）
   - 「ラテン語という「国際語」「文化語」「学術語」「書物の言語」に対してひたすらコンプレックスを持ち続けていた人々」が、日常卑近の言語で最高度の道徳や知識に触れ、活動することができるという自信を獲得できた。

（3）近代哲学と土着語

- **哲学者、文学者はラテン語ではなく土着語で書くようになった**
  - **デカルト、ヴォルテール、ホッブズ、カント**
- **デカルト（1596-1650）の『方法序説』（1637）は、はじめて土着語（フランス語）で書かれた哲学書**
  - 「私が、私の先生たちの言葉であるラテン語でなく、私の国の言葉であるフランス語で書くのは、まったく純粋で持ち前の理性しか使わない人の方が…私の意見をよりよく判断してくれることを期待しているからである」
  - 教育をあまり受けていない「ご婦人方にもなにがしかのことが分かってもらえることを願って」、『方法序説』を書いた。
- **戦前の哲学者・三木清**
  - デカルトがフランス語で書いたことを評価
  - デカルトによると良識は万物のうち最も善く分配されてゐるものであり、理性は万人において自然的に平等である。そこでデカルトは従来の学者の貴族的な言葉を棄て、市民的生活において使はれてゐる言葉で彼の哲学を述べた。商人の言葉、婦人の言葉は、今や哲学の言葉となつたのである。総ての人間は自分自身で考へることができ、学者の意見を自由に検討することができる。

(4)庶民の力が作り出した近代社会

「翻訳」と「土着化」の意義

- 各地域に、多数の庶民が、格差なく、多様な知にアクセスし、活動しやすい母語の公共空間・文化空間を作る

- **多数の一般的人々の力が集まることとなり、各社会に大きな活力が生じる。**
  - »各人は、自分たちの言語や文化に自信を抱く
  - »外来の先進の多様な知に幅広く触れ、各自の能力を磨き、発揮できるようになる。
  - »創造性の発揮も可能となる。母語の感覚なしには、創造性はあり得ない。（後ほど詳しく）。
- それまで文化的・社会的に排除されていた多数の人々が各社会で政治参加、社会参加できるようになり、その活力が近代社会を作りだした。

3　明治日本の経験
――「翻訳」と「土着化」という国づくり

（1）明治初期の日本語廃止論

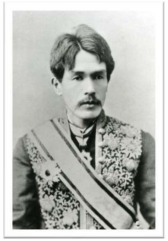
- **明治期の国語をめぐる議論**
  - 森有礼　VS ホイットニー
  - 森有礼　VS 福沢諭吉
  - 森有礼　VS 馬場辰猪　など。
- **森有礼**
  - **日本語は文法がしっかりしていない。文字も中国から借りている。**
  - **日本語では近代化できない。**
  - **英語で近代化するしかない。英語を公用語に。**
- **ホイットニー**
  - 「たとえ完全に整った国民教育体系をもってしても、多数の国民に新しい言語を教え、かれらを相当高い知的レベルにまで引き上げるには大変長い時間を要するでしょう。もし大衆を啓蒙しようとするのであれば、それは主として母国語を通じて行われるべきです」

（3）馬場辰猪の洞察

- 日本語という土着の枠組みのうえに、多様な外来の知を翻訳によって位置づけていくべき
- 馬場の議論
- **英語の取得には多大なる時間とコストがかかる**
- **国の重要問題に、一握りの特権階級しか関われなくなる。**
- **外国語の導入は、社会に必然的に大きな格差と分断を作り出し、団結心や連帯意識の形成を阻害する。**
- 「すでにわれわれの掌中にあり、それゆえわれわれすべてが知っているものを豊かで完全なものにすべく努めるべき」

（4）明治初期の大学教育

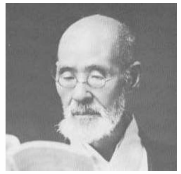
- **1870、1880年代は、英語で大学教育を行わざるを得なかった。**
  - 日本語の教科書の不足、日本人教師の不足、日本語の語彙の不足
- **「英語達人世代」**
  - 英語が抜群にうまい日本の知識人
  - 岡倉天心、内村鑑三、新島襄など。津田梅子も。



- **徐々に日本語化の流れ**
  - 井上毅（明治26年　文部大臣に就任）
  - 日本語化の必要。
  - 「現在今日に於いて文明世界に国を立つる者は、各々其の自国の言語文章を尊重して、之を普通教育の最先に置き、又その言語文章の為に最も長き時間を与えて生徒を教育することである」（「国語教員の講習会演説」明治26年8月6日）
  - 学生の英語力は明治後半から落ちていくが、夏目漱石は「日本の教育が正当な順序で発達した結果」で「当然の事」と（明治44年）。

(5)専門用語の翻訳と辞書の誕生

- 法学者・穂積陳重『法窓夜話』（大正5年）
- 東大講師になった明治14年
  - 講義はほぼ英語だったが、年に、一、二科目ずつ日本語で行うよう努力した
- 明治20年代半ば
  - 専門用語がだいたい固まる
  - 明治20年頃まで法理論を日本語で講じることは「随分難儀の事」。
  - 中国など東洋諸国にも翻訳語が輸出されるようになった



- 『言海』（明治24年）
  - 大槻文彦。近代的国家意識の持主。
  - 「米国にはウエブスター、フランスにはリトレがある。日本には私の『言海』がある」
  - 「伊藤博文が政治の世界でやっていることを、私は文学の世界でやる」
  - 「一国の国語は、外に対しては、一民族たることを証し、内にしては、同胞一体なる公義感覚を固結せしむるものにて、即ち、国語の統一は独立たる基礎にして、独立たる標識なり」（『広日本文典別記』、序文）
  - かなりの翻訳語を見出し語として収録。
  - このころ、日本語がやっと「国語」に。森羅万象が論じられる言語に。

(6)日本語による大学教育の進展

- 東京専門学校（のちの早稲田大学）
  - 開校の理念「学問の独立」「邦語による授業」。
- 高田早苗が大隈重信や小野梓らに示唆
- 小野梓（１８５２～１８８６）。
  - 東京専門学校の開校式（明治15年）
- **「一国の独立は国民の独立に基ひし、国民の独立はその精神の独立に根ざす。しかして国民精神の独立は実に学問の独立に由来するものなれば、その国を独立せしめんと欲せば、必ずまずその民を独立せしめざるを得ず。その民を独立せしめんと欲せば、必ずまずその精神を独立せしめざるを得ず。しかしてその精神を独立せしめんと欲せば、必ずまずその学問を独立せしめざるを得ず」**
  （山本利喜雄編『早稲田大学開校・東京専門学校創立廿年記念録』早稲田学舎、明治36年、所収）。

(7)邦語による授業、翻訳の大切さ

- 早稲田叢書出版の趣意（明治28年、1894年）
  - 高田早苗
  - 学問の独立
    - 「按ずるに学問は何れの国に於いても、その国の語によりて学ぶべきものなり。英人は英語を以て、仏人は仏語を以て…」
    - 研究が進めば外国語を用いて知識を得る必要はもちろんあるが、当初より外国語に頼るのは、学問の独立を危うくする。
    - 先進国、文明国とは、母語で高等教育が受けられる国という認識
  - 翻訳の大切さ。
    - 専門書の翻訳をし、時間と労力を省き、その分を本来の研究に回せるようにするべき
    - そう考えて外国の古今の名著を翻訳出版するなり。
- 早稲田叢書の最初の5年間
  - 翻訳書15点、日本人学者によるもの5点
- その後の5年間
  - 翻訳書8点、日本人学者によるもの13点

4 現在のグローバル化は「中世化」

- 「グローバル史観」の「進歩」に対する理解の誤り（下記の図式は誤り）
  「村落共同体 → 国民国家 →
  地域統合体 → 普遍的で単一の世界秩序・枠組み
- 「土着から普遍へ」ではなく、「普遍から、複数の土着へ」
  - 「普遍」と意識されることの多い外来の先進の知を、「翻訳」を通じて土着に位置づけ、土着の文脈を豊かにし、各社会の庶民が参加しやすい空間を作っていく過程こそ、「近代化」であり「進歩」
  - 多元的な発展、多元的な近代社会のイメージ
- 現在のグローバル化は「進歩」どころか「中世」への逆戻り
  - 国籍を意識せず、普遍語を用いる「グローバル・エリート」
  - 庶民の政治参加は事実上制限
    - 民主主義よりも、グローバルな投資家や企業の評価を気にする政治
  - 「１％対９９％」としばしば称される格差社会の実現、福祉は大幅低下
  - 非英語国民は、自国の言語や文化への自信をはく奪される。
    - 英語以外の言語は、「国語」ではなく「現地語」に
  - 庶民の知的世界は大幅縮小。

Ⅳ　英語化は、日本の社会や学問にどのような影響を及ぼすか

高等教育の英語化の負の影響

（１）専門教育の水準の低下

- 明治前半は、英語やドイツ語での高等教育の経験
- 身体の健康を損なう学生の増加
  - 高等教育の邦語化を進めた一つの要因（井上毅の演説）
- お雇い外国人（レーンホルム、ベルツなど）
  - 「日本の学生は身体が弱い」
  - 「卒業すると命を損す人がたくさんあるは甚だ遺憾なり」
- 大学授業の英語化すれば現在でも変わらない恐れ
- おそらく大多数の現代の学生は健康を損なうまで努力しない
- 教育や学問の水準の低下

（2）日本語が「現地語」になる恐れ

- 「国語」
  - 知的語彙、専門的語彙を備え、森羅万象、天下国家が論じられる言葉
- 「現地語」
  - 日常卑近のことしか論じられない言葉
  - 旧植民地諸国の日常語
- 大学授業の英語化の影響
  - 専門書、テキストの需要の低下
    - 大学の授業は専門書、テキストの大口の需要先
    - 専門書の邦訳、邦語の研究書の出版は難しくなる恐れ
  - 日本語の現地語化
    - 近い将来、日本語は、知的、専門的語彙を失う恐れ
    - 日本語では、第一線の知的な話題を語れなくなる可能性大

（３）母語と創造性

- 高く評価されている日本人の創造性
- 21世紀に入ってからの自然科学分野のノーベル賞受賞者
  - 1位　アメリカ、2位　日本
- 創造には母語が不可欠。言語化の過程。
  - 「ひらめき」、既存のものへの「違和感」を言語化する作業が、新しいものを生み出す際には不可欠。
  - この作業は、生活に根差した言語（母語）でしかありえない。
  - 例、野中郁次郎『知識創造企業』（1995）
    - 日本の製造業の強さは、暗黙知から明示的な知識を作り出すプロセスの巧みさ
- 創造には、学際的研究も必要
  - 他分野の知見と組み合わせ、応用する
  - 外国語で他分野の文献まで読み込むのはなかなか困難

ノーベル賞と母語

- 韓国の新聞『韓国日報』2008年10月9日
  - 日本がノーベル賞をとれるのは、自国語で深く思考するから
  - 韓国も、英語ではなく韓国語で科学教育を行うべき
- 「名門大学であればあるほど、理学部・工学部・医学部の物理・科学・生理学などの基礎分野に英語教材が使われる。
- 内容理解だけでも不足な時間に外国語の負担まで重なっては、韓国語で学ぶ場合に比べると半分も学べない。（略）
- 教授たちは、基礎科学分野の名著がまともに翻訳されていないからだというが、このように原書で教えていては翻訳する意味がなくなる。
- 韓国語なら10冊読めるであろう専攻書籍を、一冊把握することも手におえないから、基本の面で韓国の大学生たちが日本の大学生たちよりも遅れるのは当然だ」

- 益川敏英氏（2008年 ノーベル物理学賞）（『朝日新聞』2014年11月26日）
  - 日本語で最先端まで勉強できるのが日本の強み
  - 「ノーベル物理学賞をもらった後、招かれて旅した中国と韓国で発見がありました。彼らは「どうやったらノーベル賞が取れるか」を真剣に考えていた。国力にそう違いはないはずの日本が次々に取るのはなぜか、と。その答えが、日本語で最先端のところまで勉強できるからではないか、というのです。自国語で深く考えることができるのはすごいことだ、と」。
- **インドの場合**
  - 現在、大学以上の教育は英語のみ。
  - インドの言語で専門教育を受けられるようにすべきだという議論が高まっている。
  - 現地の識者
    - 「このままではインド版アントニ・ガウディは永遠に生まれない。専門教育が英語でしか提供されない環境では、他人のコピーしか作り出せない」

補論　音読み、訓読みの効用（鈴木、1990年）

- 漢字の「音読み、訓読み」の強み
- 英語の高級語彙は、ラテン語やギリシャ語から作られたものがほとんど。
  - 例、hydro（水）＋cephal-（頭）
  - pyro（火）　＋　clas（砕く）
- 専門家以外は、初見では理解できず、推測もできず、記憶にも残りにくい。
- 日本語の場合、訓読みで大和言葉と結び付けられているので、専門家以外でも意味を推測できる。記憶しやすい。
  - 水　＝　スイ　＝　みず
  - 砕　＝　サイ　＝　くだく
  - 流　＝　リュウ　＝　ながれる

英語	日本語
hydrocephalus	水頭症
pyroclastic flow	火砕流
pithecanthrope	猿人
anthropophagy	食人
heliotropism	向日性

参考：韓国の大学の英語化

- Piller, I. and Cho, J., "Neoliberalism as Language Policy," *Language and Society*, vol. 42, 2013
- KAIST（Korea Advanced Institute of Science and Technology, 旧・韓国科学技術院）
- 米国人の学者を学長を据える
- 大学の国際ランキング上昇が第一目標
- 「国際化」指標
  - ・教員全体での外国人教員の割合、留学生の数、交換留学生の数、英語で教える授業の割合
- KAISTは100％英語化
  - 「日本語」「中国語」「フランス語」も英語で教える。
- 大学当局は、すべての新入生に対して大学に対する批判や抗議活動への参加を禁じる。
- 2011年には4人の学生と1人の教員が自殺し社会問題に。
- 著者の見解
  - 「敗者」意識の蔓延
  - 教育業界、大学業界への英語の押し付けによって、批判的言論が少なくなるのではないかという懸念。

(4)教育費の高騰、教育格差の拡大、国民の分断

- 学校の英語教育だけではバイリンガルにはなれず、セミリンガル化する危険性
  - シンガポールの例
  - 二か国語で新聞記事が理解できるのは１３％に過ぎないという報告など（永井 2015）
- 小学校の英語正式教科化、大学授業の英語化の帰結
  - 中学入試で英語が必修科目に。
  - 英語での面接、リスニング
  - 夏休みには、語学留学する小学生が増大
  - 「教育移住」の一般化（韓国ではすでにそう）
  - 教育費の高騰
    - それに対応できるのは富裕層のみ
  - 教育の格差拡大
- 近い将来、へんな「エリート」の増殖
  - （日本語や日本的常識、日本的情緒のわからぬエリートが日本社会をさらにどんどん変えるという悪夢）

(5)言語と学問研究

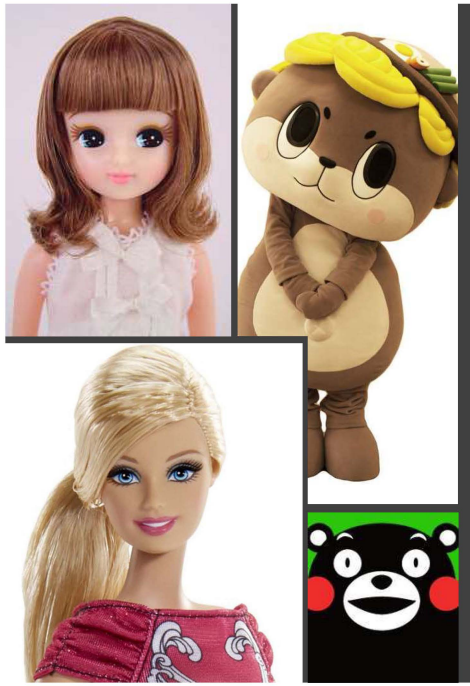
- 言語による認識の相違
  - 「記憶、知覚、連想関係などの思考領域、自分の位置を知るという実用的スキル」には母語の影響が及ぶことが実証的に報告されている（ドイッチャー2012年）
- 松尾義之『日本語の科学が世界を変える』（筑摩書房、2014年）
- 長谷川三千子『日本語の哲学へ』（ちくま新書、2012年）
  - 和辻哲郎は、言語による人間観、世界観の相違を問題視。
  - 日本語の哲学を模索。長谷川はその継承の必要性を主張

人の呼び方と、自我観の違い(鈴木、1973など)

- 欧米言語
  - 一人称、二人称代名詞　…　少ない(I, you)
- 日本語
  - 一人称、二人称代名詞　…　多数、多様（私、僕、俺、あなた、君、貴様、お前…）
  - 親族名称や役割名称を用いるのも普通(社長、パパ、お姉ちゃん、先生)
- 欧米では、**「自己認識が先、状況認識があと」**
- 日本では、**「状況認識が先、自己認識があと」**
  - 日本では、自己は必ず状況における他者や事物、役割との関係において認識される
- Markus & Kitayama, 1991などの文化心理学の知見によっても、自我観の相違は支持
  - 「相互独立的自我観」（independent construal of the self）
  - 「相互協調的自我観」（interdependent construal of the self）

道徳観の違い

- **日本では、「互譲互助」の道徳が発達**
  - 他者の気持ちや周囲の状況を敏感に読みとり、多様な他者の視点を内面化し、そこから自分をみつめ、反省を通じて既存の自己のあり方を改めることが求められる(Markus & Kitayama 1991、東　1994）。
  - 自己調整的主体の育成に注力（東、恒吉）
  - 事前調整型、けんか両成敗
  - おもいやり、やさしさ、共感、気配り、反省、自己批判、自己変革、修行
- **欧米では、公正さとコンプライアンスの道徳が発達**
  - 不変の「I」どうしの衝突は、不可避
  - 衝突したあと、いかに公正に解決するか
  - 事後調整型、訴訟社会
  - 言語的自己主張、論理的推論、コンプライアンス（法令順守）、普遍的原理・ルールへの憧憬、原理に沿った状況の変革
- **一例をあげれば、「人権」の理解の仕方、人権教育の手法にも自我観、道徳観の相違から由来する文化差がみられる。**
  - 感情移入能力の陶冶を通じ、各個人を相互協調的主体に育成することによって、秩序形成を図る日本型手法の意識化、定式化の必要（Ｓｅ　＆　Ｋａｒａｔｓｕ2004, 施2009）。



リカちゃん、くまモンの目の秘密

- リカちゃんの眼
  - 49年変わらない特徴
  - まっすぐ前をみつめてはいない。
  - 少し左上に視線が行くように制作
  - 子どもの感じる圧迫感をさけるため
- 米国のバービー人形
  - まっすぐ前を見つめている
- 日本での「ゆるキャラ」流行のコツ
  - 「キャラの視線が相手と合わないこと」。
  - 「しんじょうくん」（2016年ゆるキャラグランプリ、高知県須崎市）の仕掛人、守時健氏（『毎日新聞』2019年1月3日付）

©2010 熊本県くまモン

V　今後の日本、および日本の高等教育、研究の針路はどうあるべきか。

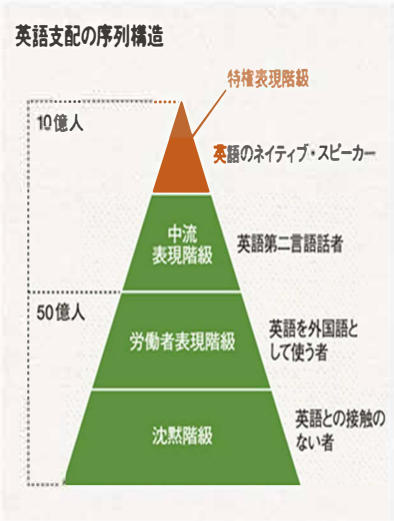
「日本らしさ」や「日本の良さや強み」を棄て去る「グローバル化（米英化）」「改革」ではなく、それらを活かす国作りや世界貢献を。

1　これからの国づくり

- 「グローバル化」に対する警戒心が必要
- 特に資本の国際的移動には一定の規制の必要性
- 多数の人々が格差なくアクセスできる公共空間の再構築と充実を
  - 内需中心型の国づくりを。
    - 「外需を取り込め！」「打って出ろ！」の安易さ。
  - 日本語で高等教育が受けられ、専門職に就ける国づくり
  - 外来の先進の知に大いに学ぶべきだが、それを一般的日本人の万人の共有物となるよう「翻訳」「土着化」する必要。
  - 「翻訳」「土着化」により多様な外来の知を適切に位置づけた、庶民が参加しやすく、多様な機会や考え方のあふれる国づくり。

2 世界の中の日本の役割

- より「公正な」世界秩序を
  - 現在は、著しく不平等な世界秩序
  - 英語国に圧倒的に有利
- 「英語による文化支配」（津田2006）
  - 母語話者を頂点とする階層構造
  - 日本は、せいぜい3番目（「労働者表現階級」）
  - 英語文化の充実に意図せず奉仕させられ搾取されるので「労働者表現階級」という皮肉な名称
- 日本の責任
  - 非英語国の雄たる日本社会の英語化は、英語による文化支配の世界構造のいっそうの固定化につながる。
  - 日本の指導層は、もっと「公正さ」の感覚を磨くべき



- 「グローバル化」とは違う理念の発信を
  - 「積極的に学びあう、公正なる棲み分け型世界」
  - 各々のナショナルな言語と文化に根差した多元的世界という理想的世界秩序
- 日本の国際貢献
  - 国境を取り払うグローバル化推進の片棒を担ぐのではなく、国作りの援助の積極的展開を。
    - 各々の自言語・自文化を生かした近代的国作りの支援
  - 土着の文化の活用と、外来の知の「翻訳」と「土着化」からなる国作りのノウハウの体系化と普及。
    - 日本には「翻訳」と「土着化」の経験の蓄積がある
    - 日本の大学や会社での「英語公用語化」ではなく、新興諸国でナショナルな言語による高等教育や専門職への就職が可能になるような国づくりの支援をすべき。

3　日本の高等教育、学問研究の針路

- 現行の大学授業の大幅な英語化はあまり意味がないのでは。
- 教育、思考、創造の過程から日本語を排除すべきではない。
- もちろん、これは「外国語学習」「英語学習」を否定するわけでは毛頭ない。
  - 研究において情報収集、成果発表のための外国語（英語）は大いに必要
  - そのための教育も必要。
- ぎりぎりまで母語で考えぬき、最後の段階で英語などの外国語で発表する形のほうが、創造性ある研究が可能では
- 高等教育・研究機関の制度設計
- 大学に「翻訳センター」を作る
- 翻訳スタッフ、校閲スタッフの拡充など